

2020年4月5日

キャリアコンサルティング技能検定2級 学科・論述・面接試験 合格体験記

2級受検番号：NO.05S1520073 氏名 C. K (大阪府 在住)

■2級技能士を目指したきっかけ
社会福祉系の専門職として長年従事してきました。現在は、私のような専門職や、無資格で社会福祉の仕事に興味のある人々と、そのような人々を求める法人とのマッチング支援をしています。キャリア支援に携わる者として、まずは、国家資格キャリアコンサルタント（以降、国キャリア）を取得。日々の業務において、研鑽を続けていくモチベーションの維持と自分自身の成長を自覚できる証として、ステップアップのために2級技能士をめざしました。
■当初の勉強法
2級技能士試験を「国キャリアの延長のようなもの」と考えていたので、日々の業務のなかで、意識して丁寧な面談を心がけるくらいでした。学科試験が終わり、「このまま何もやらないのはさすがに不安だわ」と考え、対策講座に参加したところ、試験を受ける心がまえや試験としてのキャリアコンサルティングが余りにもできていないことに愕然とし、かなり焦ったことをはっきりと覚えています。対策講座に行って初めて、「これは試験なのだ」と痛感した次第です。
■合格のきっかけ
2級技能士検定は、日々の業務の延長としてキャリアコンサルティングを披露する場ではなく、試験です。試験だということを意識し、その重要性を認識したことが、合格のきっかけになりました。試験には対策が必要だと実感したのが、「1級キャリアコンサルティング技能士の会」の対策講座でした。試験である、ということは、試験における最低限の作法と技法を、試験官に見せることができなければ、合格できない、ということです。
■学科試験の勉強
対策本を1冊購入して、徹底的に解きました。2級技能士検定と国キャリアの過去問は、試験機関のホームページ上にあるものを印刷して、それぞれ直近の3回分を解きました。学科は、解答を覚えてしまうのではなく、なぜその解答になるのかを理解することが大切です。
■論述試験対策
当初は、論述試験の書き方がよくわからなくて、何をどう書けばよいのか、ずいぶん悩みました。本当に書けませんでした。学ぶことは真似ること、と割り切り、模範解答をひたすら真似しました。書くべきポイントを外さないこと、作法を自分のものにすること、論理的に展開すること、の3点を意識して答案用紙に書く練習をしました。最初のころは時間を気にせず、丁寧に書くことを心がけました。資格ホルダーの方に、書いたものを添削してもらおうと、なお良いと思います。私の場合、実際の本試験では、記述し終えたのは終了間際でしたが、丁寧に記述したことが奏功したと思います。結果として、論述試験と面接試験は別物ではなくて、論述ができるようになることは、面接（試験）ができるようになることだと解ってきます。
■面接試験対策
受検票に記されているケースを、まずは相談者になったつもりで思いを馳せ、その背景を想像しました。そして、対策講座でケースのロールプレイをし、講師の方々や受講者、できるだけ多くの方の前で披露して、的確なフィードバックをもらいました。自分自身の話し方や態度の癖は、自分ではわかりづらいものです。客観的な目がたくさんあるほうが、多くの気づきを得ることが

できます。また、ロールプレイの際は、面接試験の4つの評価区分ごとに合格点がとれるよう、流れを確認しながら行いました。

■受検される方へメッセージ

私は、初受検で合格することができましたが、対策講座で学べば学ぶほど、どうしていいかわからなくなり、方向性が定まらずに悩みました。試験である以上、合格するための最低限の作法や技法は、それが本番で使えるように身につけなければなりません、実はそれがすべてではありません。

最終的には、目の前のクライアントにどれだけ真摯に向き合えるかが、合否の分かれ目ではないかと思うのです。ケースのロールプレイ中には、私には20分がとても長く感じられて、「早くベルが鳴らないかな」と常に考えていました。クライアントの相談を聴きながら、頭の片隅では時間のことを気にしていたのです。なので、気持ちのどこかで苦痛を感じていました。しかしながら、「目の前のクライアントだけに集中しよう」と気持ちを切り替えて臨んだ面接試験では、20分があっという間に過ぎました。こんなに短く感じたのは、本試験のロールプレイが初めてでした。終了後には清々しささえ感じ、「これでだめだったら、また頑張ろう」と、爽快な気分で試験場を後にしました。私は、「関係構築」の点数がいちばん高かったのですが、クライアントに集中したことが、そのような結果につながったのだと考えています。

受検対策は非常に重要です。どんな試験なのか、どんな心構えで臨めばいいのか、相手を知ることが受検の第一歩です。しかしながら本番は、十分に対策を講じたうえで、技法ではなく、心から目の前のクライアントを受容することが大切なのです。そして、その姿勢は、試験官にもクライアントにも伝わっているはずですよ。

まずは一歩を踏みだしてください。受検される皆さまの合格を、心より祈念しています。